

羽根の禿

初演 天明五年(1805)正月 江戸 桐座

作詞 初代 瀬川 如臈

作曲 初代 杵屋 正次郎

夕テ唄 松永 忠五郎

〔前舞(三下り)〕

戀の種 時き初めしより 色と言ふ

言葉はいづれ 此の里に

誠 こもりし 一廓

丸い世界や 粹の世に

嘘とは野暮の 誤りと

笑ふ禿の しほらしや

禿々かむろかむろと 澤山たくさんさうに 言うてくだんすな

こちや華魁おいらんに

戀の諸分けしよわけや 手管てくだの譯わけも

教えさんした 筆ふでの綾あや

よう知ると 思おもはんせ

おお恥はずづかしや 恥はずづかし

しどけ態なりふり振り可愛あはれらし

〔挿入歌〕宵は待ち(明けの鐘)

宵よいは待ち

そして恨うらみて 暁あけの

別わかれの鶏どりと 皆みな人の

憎にくまれ口くちな

あれ啼なくわいな

聞きかせともなき

耳みみに手てを

鐘かねは上野かみか 浅草あさくさか



〔二上り〕

文かみがやりたや 彼かの君きみ様さまへ

取りや違ちがえて 餘よの人にやるな

花かの彼かの様さまの

さアて 花かの彼かの様さまの 手てに渡わたせ

朝あさのや 六むつから 六むつから

上うはぎぬ衣したぎぬ 下したぎぬ衣うはぎぬ ひつ重かさねね

禿かむろは袖そでの振ふり始はじめ

つく つく つくには 羽根はねを突つく

一ひイ二ふウ三みイ四よウ 五いつえ重ななえに七ななえ重ななえに

琴じゆうさんは十三じゆうし十四じゆうご 手ては間まおく

見みよなら 見みよなら

松まつをかざして 梅うめの折おり枝えだ

それそれさ これこれさ

それそれ好すいた三しゃみ味みの手て

梅うめは白しろひよ 桜さくらは花はなよ

梅うめは白しろひよ 桜さくらは花はなよ  
いつも眺ながめは 富ふ士じの白しろ雪ゆき

